

黙阿弥の意図したことば

——「三人吉三」を例として——

秋 永 一 枝

【キーワード】河竹黙阿弥 「三人吉三」 黙阿弥のことば 「三人吉三」の発音

1. 黙阿弥本の善本とは？

河竹黙阿弥は本名吉村新七、幼名は芳三郎といい、文化十三年（1816年）二月三日、江戸日本橋通二丁目の俗称式部小路（しきぶこうじ）に生れた。現在の中央区日本橋高島屋北側である。

父は四代目越後屋勘兵衛で湯屋株の売買業から、のち芝金杉（現港区芝）に移って質屋をいとなんだ。文政八年（1825年）、芳三郎数え十歳の時である。十四、五、六歳の芳三郎は遊蕩児であったが、後三年間の貸本屋の手代等のあと、天保六年（1835年）二十歳の時五世鶴屋南北に入門して勝諺藏と称し狂言作者生活に入る。その後作者名は柴（斯波）晋輔、二世河竹新七等変るが、明治十四年六十六歳でひとまずの引退後は（河竹）黙阿弥と改名する。明治二十五年七十七歳の喜寿の祝のあと二度めの引退を発表し、翌二十六年（1893年）一月二十二日、本所南二葉町（現在墨田区亀沢町）で没する。享年七十八歳、法名は釈黙阿居士。長女糸の養子、河竹繁俊の『河竹黙阿弥¹⁾』にくわしい。

幕末から明治という彼の生涯は、天保の改革あり、安政二年（1855年）の大地震あり、たび重なる大火あり、更には慶応四年（明治元年）の戊辰戦争から維新による政権交代など正に激動の時代であった。作者生活五十年という長期の執筆は、幕末から明治という時代に即して扱う題材も様式も変化するし、それに伴ない扱う江戸弁も多少変化した筈である。その上台本という性格上、小説・随筆といった他のジャンルと異なり演者による改変も多い。何よりも関東大震災で自筆本が焼失したことは、言葉の研究のうえでも大きな痛手であった。

筆者が『東京弁用例辞典』作成の中で黙阿弥の江戸弁も参照しカードを取り入力したのは、河竹繁俊校訂『黙阿弥名作選』（創元社刊、昭和二十七年九月～二十八年八月）である。以下、ここで引用した資料とその略称を記しておく。なお引用の語で底本に振仮名のあるものは（ ）内に記し、底本の巻号・頁を付した。字体は新字体に改めたが、仮名遣い、送り仮名は原本のままである。

『黙阿弥名作選』略称等資料一覧

黙一 三人 卷一 三人吉三廓初買（三人吉三）

黙一 弁天 卷一 青砥稿花紅彩畫（辨天小僧）

黙二	新三	卷二	梅雨小袖昔八丈（髪結新三）
黙四	村井	卷四	勤善懲惡視機関（村井長庵巧破傘）
黙四	盲長屋	卷四	盲長屋梅加賀蔭（加賀蔭梅吉と按摩道玄）
黙五	小猿	卷五	網模様燈籠菊桐（小猿七之助）

入力様式は以下のように「見出し（現代仮名遣）・出典・用例」の順で、一例を上げておく。

しっこし・黙二 新三289・《勝奴》そのくれえな男なら、もう少し尻腰（しっこし）がありさうなものだね。

しっこし・黙二 新三320・《新三》……幾日（いくか）たつても来ねえから尻腰（しっこし）のねえ親父だと

しっこし・黙四 盲長屋374・《道元》尻腰（しっこし）のねえ阿魔つちよだなあ。

しっこし・黙四 村井118・《長庵》……尻腰（しっこし）のねえ大だはけめ。

ひっこしのない・黙一 弁天132・《南郷》えい、この野郎（やらう）は、ひっこしのねえ、もうちつと我慢（がまん）すりやあい、に、

この語は現在に至るまで延々と使用されており、黙阿弥作品の用例と比較することは有用である。但しここで問題となるのは黙阿弥作品の諸本の校合が未だに行なわれていないことである。

活字本では黙阿弥自身の改訂によるとされている『狂言百種』（明治二十五年四月～十二月。春陽堂刊）がある。恐らく家の台本によったものであろうが、印刷の出だしは早かったとしても黙阿弥は翌二十六年一月には没している。細部にまで作者の眼が届いたものかどうか疑わしい。まして七十七という高齢であれば、校正などは弟子筋の人たちによると考えてもよからう。

これより先、「読売新聞」に連載された「三人吉三」（明治二十一年（1888年）二月二十一日～五月十七日）があり、それによる今尾哲也校注『新潮日本古典集成 三人吉三廓初買』が昭和五十九年七月に刊行されている。今尾によれば読売版は「初演本の忠実な活字化と見られ……入手し得る唯一の善本」とある。たしかに安政七年（1860年）初春の初演からまだ二十八年しかたっていない。

ここで前出の『河竹黙阿弥』により、台本ができるまでとそれが活字化されるまでのありさまを引用する。黙阿弥の草稿は少しばかり残っているが²⁾、何とも読みにくい文字である。自身清書した横書本を「舞台で使用する縦本」（台本）にする「場合には門弟に清書させた。」とある。（336ページ）

『狂言百種』に関しても（十二月）「六日」の日記に「太田筆耕料取りに来る。」とある箇所には、「太田筆耕料云々といふのは、狂言百種 of 原稿を書く為めや、正本の清書を依頼してあつた人のことでその人に筆耕料を払つたといふのである。」という、著者の注がある（470ページ）。

黙阿弥の原稿及び演劇博物館の横本は濁点あり、振仮名なし。読売版及び『狂言百種』

の「三人吉三」は濁点あり、漢字には総ルビである。これらを活字にするための清書は門弟が行なったというより、読売版は新聞社関係の、『狂言百種』は太田某という、ともに弟子筋でない人の文字おこしと推測する。役者への抜き書きは仮名書きが多いようで、弟子筋の作者たちが多少の誤りはあるにせよ、歴史がな・総ルビ付きの原稿が書けるとは思えないし、活字本には素人故の誤写があるようである。

幸い「三人吉三」の「庚申塚の場」には新旧の録音もあれば歌舞伎座昭和四十一年の台本もある。それらから問題となる箇所をとりあげてみたいと思う。

2. 地名にみる諸本の異同

今尾が「底本選定の理由」の一つにあげたように読売版では地名も鎌倉近辺で、『狂言百種』や『名作選』のように江戸の地名に改められてはいない。但し、「一の橋弁天、大川の遠見」や「柳原」など江戸の地名が共通し、読売版が鎌倉近辺のみの地名で通しているわけではない。また、両書とも鎌倉の「荏柄（えがら）の天神」のままであるなど、すべて江戸に改めたわけではない。今それらを表1に示しておく。（頭の数字は新（新潮社本）・名（名作選）のページを示す）

表1に示したように、地名の場合多少の例外はあるが、「花水橋材木河岸」が「両国橋西川岸」、「雪の下」が「本町」、「葛西が谷の割下水」が「本所の割下水」、「稲瀬川」が「大川端」、「梅が谷」が「亀井戸」、「割下水」、「南郷」が「本郷」、「お猿畑」が「東葛西」、藤沢の「竜口寺」が本所の「法恩寺」、「高麗寺前」が「大恩寺前」、「御輿が嶽」が「巢鴨在」、「腰越」が「駒込」などに変化している。幕府の禁忌から脱して堂々江戸の地名を記す時代となったのである。『名作選』で「本所」に「ほんじょう」の振仮名があるのは、当時の発音によってのことである。

円朝の「塩原多助一代記」にも「其の頃の落首に、「本所（ほんじょう）に過ぎたるものが二つあり、津軽大名、炭屋塩原」と歌にまで頌（うた）はれまして、」とあり、敗戦頃まで東京旧市内ではジョーと延ばした発音が時に聞かれたものである。

「梅が谷」（新）が「亀井戸」（名）となり、更に歌舞伎座台本でそれが「小梅」となるのは、「梅が谷」の「梅」をきかせたものだろう。

黙阿弥が晩年住んだ南二葉町は南割下水の北側にあり、「法恩寺」の通りに近接する。「大恩寺前」とあるのは下谷竜泉寺町の「大音寺前」のこと。「恩」と書く習慣があったか、「法恩寺」にひかれて筆がすべったか疑問である。

「しゃも文」を「坊主軍鶏」としたのは、当時有名な店だったばかりでなく、黙阿弥の最後の弟子、竹柴晋吉こと平山晋吉の家の職業だったことにもよろうか。初代が坊主頭だったことから「ほうずのしやもや³⁾」が転じて店の名も「ほうずしゃも」となり回向院側で今に至る。

3. 問題のあることば（末尾影印参照）

次に、問題のあることばを若干、以下の諸本から取り出して比較する（表2）。

表 1

新潮社本（日本古典集成）	黙阿弥名作選
81 花水橋材木河岸の場	3 両国橋西川岸の場
82 向ふ一の橋弁天、大川の遠見、すべて、鎌倉、花水橋南岸の体	3 向う一の橋弁天、大川の遠見、総て 両国元柳橋川岸の体
89 荏柄の天神	5 荏柄の天神
97 柳原	8 柳原
100 雪の下	9 本町
102 葛西が谷（鎌倉）の割下水	9 本所の割下水
81 稲瀬川庚申塚の場	3、10 大川端庚申塚の場
107 梅が谷の方へは（鎌倉）	11 亀井戸の方へは
108 梅が谷まで	11 割下水迄
108 南郷二丁目（茅ヶ崎）	11 本郷二丁目
109 葛西が谷で	11 割下水で
131 葛西が谷、夜鷹宿の場	18 割下水伝吉内の場
185 葛西が谷、夜鷹宿の体	19 割下水伝吉内の体
196 お猿畑から（逗子）	22 東葛西から
196 稲瀬川	22 両国川
201 竜口寺の門前	24 法恩寺の門前
259 平塚高麗寺前の場	29 廓裏大恩寺前の場
330 平塚高麗寺前	29 大恩寺前の場
413 御輿が嶽吉祥院の場	33 巢鴨在吉祥院の場
414 鎌倉、御輿が嶽、吉祥院、古寺	33 吉祥院古寺の体
429 しやも文に二年居た	38 坊主軍鶏に二年居やした
433 花水橋	39 両国橋
438 腰越まで	41 駒込まで
438 腰越の早桶屋へ	41 駒込の早桶屋へ
465 南郷火の見櫓の場	50 本郷火の見櫓の場

表 2

演舞脚本	読売版	新潮社本	狂言百種	黙阿弥名作選	歌舞伎台本
盆を敷てあきない升もの	109 奥源(ござ)を敷(ひ)いて踊(びま)すもの	14 奥(ござ)の上(うへ)にて	11 塵(ござ)の上(うへ)にて	11 塵(ござ)の上(うへ)にて	
どろぼうさ	111 盗賊(どろぼう)さ	111 盗賊(どろぼう)さ	15 どろぼうさ	12 どろぼうさ	27 盗人(ぬすつと)だ(お)
歌女之丞(なつ)として	112 歌女之丞(なつ)として	112 おとせ、だちとして	15 おとせたちとして	12 おとせたちとして	28 おとせたちとして
トにたり思入	ト完綱(に)つこり思入(おも)いれ	112 ト、にたり思入	15 トにたり思入(おも)いれ	12 トにたり思入	
棹の幸かぬれ手であわ	113 棹(さそ)の幸(しづ)くか濡(ぬ)れ手(あ)わ	113 棹(さそ)の滴(しづ)くか濡(ぬ)れ手(あ)わ	15 棹(さほ)の幸(しづ)くか濡(ぬ)れ手(あ)わ	13 棹の幸か濡手で泡	28 棹(さお)のしずくか濡手で粟(お)糠
ト襦ろの財布を出しにたり思入	ト襦(は)とところの財布(さい)を出しにたり思入(おも)いれ	114 ト、襦の財布を出し、にたり思入	15 ト襦(ふと)とところの財布(さい)を出しにたり思入(おも)いれ	13 ト襦(ふと)とところの財布(さい)を出し、にたり思入	28 ト襦の財布を出し、にたり思入
御厄(おん)ひきう厄落し	114 御厄(おん)ひきう厄落(やく)おと	114 御厄(おん)ひきう厄落(やく)おと	16 お厄(やく)ひき(お)おと	13 お厄(やく)ひき(お)おと	28 御厄(おん)ひき(やく)おと
本に今夜ハ筋分	114 本(ほん)に今夜(こん)やハ筋分(しんぶん)か	114 本(ほん)に今夜(こん)やハ筋分(しんぶん)か	16 本(ほん)に今夜(こん)やハ筋分(しんぶん)か	13 本(ほん)に今夜(こん)やハ筋分(しんぶん)か	28 本(ほん)に今夜(こん)やハ筋分(しんぶん)か
濡手で粟の百両を	115 濡手(ぬ)れ手(あ)わの百両(ひゃくりやう)を	115 濡手(ぬ)れ手(あ)わの百両(ひゃくりやう)を	16 濡手(ぬ)れ手(あ)わの百両(ひゃくりやう)を	13 濡手(ぬ)れ手(あ)わの百両(ひゃくりやう)を	29 濡手で粟の百両を(お)坊
心ハ同じ盗人根性	116 心(こゝろ)ハ同(おな)じ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)	116 心(こゝろ)ハ同(おな)じ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)	16 心(こゝろ)ハ同(おな)じ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)	16 心(こゝろ)ハ同(おな)じ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)	29 心(こゝろ)ハ同(おな)じ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)
盗賊(どろぼう)とは気が附(つ)かぬ	116 盗賊(どろぼう)とは気が附(つ)かぬ	116 盗賊(どろぼう)とは気が附(つ)かぬ	17 盗賊(どろぼう)とは気が附(つ)かぬ	14 盗賊(どろぼう)とは気が附(つ)かぬ	29 盗賊(どろぼう)とは気が附(つ)かぬ
おれなぞア	116 己(おれ)なぞア	116 己(おれ)なぞア	17 己(おれ)なぞア	14 己(おれ)なぞア	29 己(おれ)なぞア
おぬしも定めて名のある盗人	118 おぬしも定(さだ)めて名(な)のある盗人(ぬすびと)	118 おぬしも定(さだ)めて名(な)のある盗人(ぬすびと)	17 おぬしも定(さだ)めて名(な)のある盗人(ぬすびと)	14 おぬしも定(さだ)めて名(な)のある盗人(ぬすびと)	29 おぬしも定(さだ)めて名(な)のある盗人(ぬすびと)
ぶきび(濁点?) な中へ	121 ぶきび中(な)かへ	121 ぶきび中(な)かへ	19 ぶきび中(な)かへ	15 ぶきび中(な)かへ	31 ぶきび中(な)かへ
幸ひけふハ筋分に	121 幸(さい)ひけふ今日(けふ)ハ筋分(しんぶん)に	121 幸(さい)ひけふ今日(けふ)ハ筋分(しんぶん)に	19 幸(さい)ひけふ今日(けふ)ハ筋分(しんぶん)に	15 幸(さい)ひけふ今日(けふ)ハ筋分(しんぶん)に	31 幸(さい)ひけふ今日(けふ)ハ筋分(しんぶん)に
己が手に	122 己(おの)が手に	122 己(おの)が手に	20 己(おの)が手に	16 己(おの)が手に	
こなたに預て(虫損?)	123 此方(こなた)に預(あづ)けて	123 此方(こなた)に預(あづ)けて	20 此方(こなた)に預(あづ)けて	16 此方(こなた)に預(あづ)けて	32 此方(こなた)に預(あづ)けて
こなたの魂しい	125 此方(こなた)の魂(たまし)ひ	125 此方(こなた)の魂(たまし)ひ	21 此方(こなた)の魂(たまし)ひ	17 此方(こなた)の魂(たまし)ひ	33 此方(こなた)の魂(たまし)ひ
心ハ替らぬ盗人根性	127 心(こゝろ)ハ替(かは)らぬ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)	127 心(こゝろ)ハ替(かは)らぬ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)	21 心(こゝろ)ハ替(かは)らぬ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)	17 心(こゝろ)ハ替(かは)らぬ盗人根性(ぬすびと)の根性(こんじやう)	
うぬ盗人め	130 汝(うぬ)盗人(ぬすつと)め	122 汝(うぬ)盗人(ぬすつと)め	22 汝(うぬ)盗人(ぬすつと)め	18 汝(うぬ)盗人(ぬすつと)め	33 汝(うぬ)盗人(ぬすつと)め

演博横本—早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵の横本。黙阿弥蔵書印の角印。

イ12 410 桑三郎、歌女之丞、羽左衛門、小団次、権十郎の役者名で記す。
読売版—読売新聞に明治二十一年二月より連載。マイクロフィルムによる。

新潮社本—(前出)、狂言百種—(前出)、黙阿弥名作選—(前出)

歌舞伎台本—昭和四十一年二月歌舞伎座上演によるCD「歌舞伎名作選集」11
の付録台本。お嬢吉三(七代目尾上梅幸)、お坊吉三(十七代目中村勘三郎)、和
尚吉三(二代目尾上松緑)

前にも記したように、横本には漢字に振仮名なく、勿論歴史的仮名遣ではない。原則として濁点・半濁点はある。横本に「菰」とあるからコモが正しいわけでもなく、ゴザのよみでいいのだろう。

ドロボウは、諸本により表記も語形もまちまちである。横本の「どろぼう」「追おとし」は問題ないが、「盗人」がすべてヌストでよいのか、読売版のように「どろぼう」「ぬすつと」とよますのか、『狂言百種』のように「ぬすびと」「ぬすつと」とよますのか。読売版は横本の「盗人根性」に「どろぼうこんじやう」の振仮名、横本の「追おとし」を「盗賊(どろぼう)」としている。なお歌舞伎台本ではこの辺りドロボウは消えてすべてヌストになっている。後世の台本の場合、ドロボウではいかにも日常語で、同義のヌストや類義のオイオトシの方が黙阿弥物らしい古めかしさがあると演者にも好まれたのではなかったか。現在「盗賊」というと何となく大がかりで集団をなすような感じで、「どろぼう」とイコールにしがたいが、幕末はそうでもないようである。天保三年生れの二代目松林伯円が「泥坊伯円」と呼ばれて人気があり、彼を後援した四代目市川小団次が「泥坊役者」と呼ばれ、伯円の講談を芝居にした黙阿弥が「泥坊作者」と呼ばれたこともあったという。

このように「泥坊……」は幕末では「泥坊物を語る・演じる・書く人」ではあるが、後世の感覚では「泥坊する人」のように受けとられ、本人たちも心よく思わないようになったろう。黙阿弥自身もまた、明治十四年十一月興行「島衛月白浪」の白浪物をもって書納めの狂言とし、そのしるしにだした「引汐(ひきしほ)」という摺物にも「浜の真砂の尽(つき)せざる彼盗人の狂言を、貝(かず)多く脚色(しぐみ)しゆゑ、白波作者と言はれしも¹⁴⁾」と記す。シラナミは中国で盗人をいう「白波賊」を訓読したもので、古くから使われる故この方が何となく雅語めいて、黙阿弥自身も好んだものと思う。第一シラナミがドロボウと同義だなどと一般大衆は気がつかなかったろう。そうした明治の風潮がドロボウからヌスト、ヌストに変化させたのではあるまいか。

次の「だちだち」と「たちたち」は濁点の位置のずれによるものと思う。横本には濁点がないが、同じく演博本の横本、『三人吉三巴白浪』には「たち〜として」と「ち」に濁点がある。この箇所、おとせが取られた財布を取りもどそうとするのをお嬢吉三が振り払った。そこでおとせがタジタジと後ずさりしてよろめいて思わず川へ落ちるととるほうがよさそうだ。新潮社本の注では「だちだち」は「細かく震える様子を表す副詞。」とあ

る。これは恐らく『日本国語大辞典』の解釈によるものと思うが、その例は「鋭敏な馬の皮膚のやうにだちだちと震へる青年の肩におぶひかゝりながら」(有島武郎「或る女」)の一例のみである⁵⁾。このあと「吉祥院の場」の終でも、「是にて源次びつくりなし、たち〜として、又首へ手がさはる故取上げ見て、」(『名作選』49頁)と、「是(これ)にて源次(げんじ) 恟(びつくり) なしだち〜として……」(『狂言百種』143頁)のように異なる。源次が取り上げた生首を和尚吉三が引ったくるので、びつくりして恐らく後ずさりをしたのだから、これも「たちたち」のほうがよさそうだ。なお『新潮社本』などにはこの箇所がない。

「にったり」と「にっこり」は「多」の変体仮名が「こ」に誤られたものと思う。「トにつたり思入」及び、「月も臙に」の名せりふのあと「ト懐ろの財布を出しにつたり思入」(横本)とあるが、読売版はともに「莞爾」に「にっこり」の振仮名である。こんな時にニッコリ笑う筈はない。しめた! うまくやった! とニッターほくそ笑むのが芝居では御定法である。それを書き誤まる上に「莞爾」の字まで当てるのは作者部屋の人による文字化ではない証拠と言えよう。

アクセントに係するものは後にして、次のオンヤクかオヤクかは当時の「厄払い」の音声資料が残ってないので不明だが、録音はすべてオンヤーク ハライマシヨ ヤクオトシ⁶⁾である。その厄落しの来るのはセツブンとばかり思っていたが、読売版に「としこし」の振仮名があり、『狂言百種』は「せつぶん」の振仮名がある。六代目尾上菊五郎使用の和尚吉三の書抜⁷⁾に「幸(さひわ) ひ今日(けふ) ハ節分(せつぶん) に」と振仮名があり、録音はともにセツブンのみ。黙阿弥原本は演博横本のように「節分」に振仮名がなかったものと思う。このせりふで、トシコシと言わせたいなら、作者は恐らく「年越し」と書いたのではあるまいか。

例えば横本で「ム、とうなづき」を読売版・『狂言百種』22頁ともに「ム、と(ト) 點頭(うなづき)」とするなど、活字本で漢字は説明に当てたものが多くみられる。横本が漢字で記してあれば素直にその字音で読むものと思われる。

次のお坊吉三のせりふ、オレナザアとオレナンザアだが、横本・歌舞伎台本は「おれなざア、『狂言百種』・『名作選』も「己(おれ) なざア」であるが、読売版は「己(おれ) なんざア」である。昭和41年の十七代目中村勘三郎はオレナザー、SP盤の沢村宗十郎はオレナンザーと発音する。「な(ん) ぞは」の変化だが、オレナザーのほうが江戸弁らしい感じがする。

次のブキビとブキミだが、読売版・『狂言百種』はともに「ぶきび」と記す。横本は虫損があつて不明だが、濁点があるらしい筆遣いである。「万延元年正月市村座」とある「鸚鵡石」には「ぶきひななかへ⁸⁾」とあり、「ひ」に濁点がない。これはブキミとよむことを示すとみるべきか。「気味」は現在でも東京弁でキビともいうが、ブキビは一拍おいて bu・bi が並び発音しにくいところから今は使われていない。先の六代目の書抜にも「不気味(ぶきみ) な中(なか) へ」とあるように、録音もブキミである。

次の和尚吉三のせりふ「盗の科でとらるゝならしかたもねへが己が手に命を捨るは悪イ

了簡(横本)の「己が手に」は問題である。横本と『名作選』は「手」で振仮名なく、『狂言百種』は「手(て)」と振仮名、読売版は「で」とあり、それを踏襲した『新潮社本』は頭注に「自ら。自分自身で。「で」は自身で、の意。」と記し、「自分から進んで」と傍注する。『日本国語大辞典』は「で」の項に「わしがでに」「我でに」「おのがでに」「お主のでに」の例をあげるが、浄瑠璃などすべて上方の作品である。

『日本方言大辞典』も「わ(あ)がでに」の解に「①自分自身で。自ら。」とし、大阪市・兵庫県・徳島県・香川県のほかに静岡県を記す。だが、江戸でこの例が無かったわけではない。前田勇編『江戸語大辞典』では「おのがでに」[己が手に] (一説に手をてと清むはいかが)と注し、宝暦六年(1756年)ごろ江戸築地に生れた天竺老人(森島中良)の「蛇蛻青大通(ぬけがらあおだいとう)」の次の例を上げる。

「己が手に蹴返して毘(わな)に懸る白痴(たわけ)共」

この注は「己が手に」と書いてもオノガデニと発音する可能性があることを示すと同時に、江戸ではオノガテニと発音することも示している。この「わ(あ)がでに」は現在でも西日本では使われる語だが、江戸では恐らく殆ど使われなところからデニがテニとも発音され、次第に「手に」と意識されるようになった。そうなると、「己が手に」よって命を捨てるのは悪い了簡だ、とも取れてくる。

七代目幸四郎のせりふでは、オノガテデと改変しているし、二代目松緑のせりふではこの部分が台本から省略されている。浄瑠璃に詳しい黙阿弥自身がデニ、テニのいずれを意図したかは今のところ不明としておく。

次に諸本「こなたに預けて」「こなたの魂(たましひ)」であり、SP盤はコナタとコンタがまじるが、歌舞伎台本には「こんた」とあり、録音もおなじである。

黙阿弥物では「村井長庵」で三次に、「小猿七之助」では七之助に以下のように「こんた」を使わせている。

こんた・黙四 村井117・《三次》……何もかも一つ懐のおれに迄不知(しら)を
きるとは、こんたもよつほど愚に返(けえ)つたの、
こんた・黙五 小猿85・《七之》……こんたのためには甥御(おひご)なる善導寺
(ぜんどうじ)の教真を、

三人吉三どうしは後の場面になっても「こなた」「おめへ」「てめへ」を使用し、初対面で名乗りをあげるこの場のような時に、同輩か目下を使う「こんた」など、黙阿弥は書かなかったものと思う。恐らく何時の頃からか、その方が江戸弁らしいと演者によって変えられたものではあるまいか。

4. 問題のある発音

さて、アクセントを含め、発音についての問題点を記す。表に掲げた「棹の雫か濡手でアワ」(お嬢吉三)、「濡手でアワの百両を」(お坊吉三)のアワである。横本ではお嬢のせりふは「あわ」と記し、それを聞いていたお坊のは「粟」と記す。読売版はともに「泡」、

『狂言百種』と『名作選』のお嬢は「泡」。お坊は『狂言百種』は「あは」で『名作選』は「あわ」、歌舞伎台本は揃って「粟」に統一している。先掲の「鸚鵡石」はお坊のせりふを「泡」とするがお嬢のせりふ部分は原本にもない。

東京アクセントでは「粟」はアワと頭高型だが、「泡」はアワガと尾高型で、助詞「の」がつくとアワノとなる。勿論歴史仮名は「泡（あわ）」と「粟（あは）」で異なり活字本はほぼ歴史仮名だが、黙阿弥自筆本の仮名遣は歴史仮名というわけではない。自筆本からひろっても三人吉三の「大名題小名題⁹⁾」の「夜鶴姿泡雪（よるのつるすがたのあはゆき）」「それゆへ」「吉例（きちれへ）」「見（み）へぬ」「いふよふだが」「やり升ふ」「ふせうだらふが」「ふかひ中（なか）」等々であり、その点は自筆本以外の横本も同様である。

横本が自筆本を丁寧にうつしたとすれば、恐らくお嬢のせりふは「粟」にあぶく銭の「泡」をかけて、アワ（泡）のアクセントではなかったか。お坊は諺通りアワ（粟）と発音した。戦後のある時期からお嬢のせりふも諺通り「粟」でなくてはおかしいという論があって、現代は両者ともアワと発音することが多いが、それは黙阿弥の意図に反するのではあるまいか。

録音では以下のようなようである。（*はコクーン歌舞伎による。）

お嬢	アワ	（泡）	十五代羽左衛門	八代福助*
	アワ	（粟）	七代梅幸	
お坊	アワノ	（泡）	八代宗十郎	
	アワノ	（泡）	十七代勘三郎	
	アワノ	（粟）	三代橋之助*	

この他2001年12月国立劇場の通しなど、筆者が見た折々の覚えでも、演者によってまちまちであるが、このほかにも現代の若手には伝わらない発音が三人吉三だけでも時々ある。

例えば地名の「小梅」は羽左衛門、梅幸ともコンメと発音するが若手ではコンメ、コウメと発音する者もある。また、ヤナギワラ（柳原）をヤナギハラ、ヤナギハラと発音したり、リョーゴクバシ（両国橋）をリョーゴクバシと発音する。羽左衛門、七代幸四郎、梅幸、松緑ともにキチジョーインだがキッショーインと発音した中堅もいた。「吉三」は「お嬢、お坊、和尚、三人」のいずれが前についてもオジョーキチサトのように尾高型に発音するのが伝承された発音だが、現在は……キチサもよく聞かれる¹⁰⁾。

総じて古めかしい言葉なら意識して習得するものだが、現代でも通じるものは伝承がおろそかになるようである。

これは固有名詞に限らない。例えば大川端庚申塚の幕切の「義を結ぼうか」は古い演者の方はギオと平板型で発音するが、現代の演者はギオと現代風のアクセントである。同様にヒヤクリョーオ、ヒヤクリョーノ（百両）が、ヒヤクリョーオ、ヒヤクリョーオとなり、ゴジューリョー（五十両）がゴジューリョーとなるなど、数詞も伝承されにくい。

キリドリ（切り取り）がキリトリ、シラウオノ（白魚）がシラウオなど個々の変化を記す

のはここまでとして、表記と訛音の相違について一言記しておきたい。

「しらねへ」「いわねへ」の類は問題ないが、「大小」「大神楽」「往来」の類は [ai] と [e:]、「帰る」「青蛙」は [ae] と [e:] のように、振仮名がないものは演者によりまちまちである。「長い」「誓い」の類を [e:]、「悪い」を [i:] と発音する人、しない人。どうもこれらは演者まかせのようである。黙阿弥の本読みがどうであったか知る由もないが、恐らくあまり台本と異ならなかったのではあるまいか。前述の「鸚鵡石」で「待ておくなせへ」「おかねへ」と「貸て貰いたい」「世間のせまい」「とるとらないは」のように書きわけてある程度ではなかったか。前述の名優たちのせりふでは連母音の融合が多出するが、それは江戸弁らしさを表現したかった、それが伝承され増幅されていったと私には思われてならない。

黙阿弥自筆本の文字づかいと発音の関係については、いずれ稿を改めて述べることにする。

注

- (1) 【増訂改版 河竹黙阿弥】（黙阿弥全集首巻 春陽堂）
- (2) 【河竹黙阿弥】336ページの次。なお『没後百年 河竹黙阿弥一人と作品一』に写真が多い。
- (3) 長谷川時雨『旧聞日本橋』（岩波文庫50ページ）には作者の父長谷川深造溪石の図版がある。
- (4) 振仮名なども【河竹黙阿弥】238ページによる。
- (5) 【現代日本文学全集】51ページにも「だちだち」とある。
- (6) 加線はその部分を高く発音することを示す。
- (7) 【没後百年 河竹黙阿弥一人と作品一】76ページ
- (8) 注(7)の76ページ
- (9) 注(7)の10ページ
- (10) 【新明解日本語アクセント辞典】で「サンニンキチサ」のみ掲げたのは誤りであった。今後サンニンキチサ^ナ（尾高型）も加えることとする。

新田の初巻
狂言百種 第七

三人吉三郎初巻

懐の財布を出しにつたり思入

ト懐の財布を出しにつたり思入

思ひ掛ねは百兩

トあり思入

厄拂ひませう厄落し

今は今夜は節分か

幸ひ今日は節分に

是から見ると己なぞア

己が手に命を捨るは悪い了簡

棹のそりもぬれぬぞ

襦袢も濡す百兩と

狂言百種 第七

あとせだちくとして思はず川へ落る

懐の財布を出しにつたり思入

ト懐の財布を出しにつたり思入

思ひ掛ねへ此百兩トにつたり思入

お厄拂ひませう厄落し

ほんに今夜は節分か

幸ひ今日は節分に

是から見ると己なぞア

己が手に命を捨るは悪い了簡

棹のそりもぬれぬぞ

襦袢も濡す百兩と